

正念相続

小川 刀耕

1 はじめに

「正念相続」ということについてお話しします。正念とは、常識的に言えば、純真とか素直とか至誠、そういうものです。相続とは、続けること。両忘庵宗活老師は、「正念相続とは、その人々にんにんにある。子供は子供、青年は青年、年寄りにんじは年寄り、その人の境涯に正念はある。」と言われておりますが、そのとおりですね。そのとおりではあるが、これはなかなか大変なものです。

2 聞思修

これに入るには、道から入るより外ない。『涅槃經』に【道に入るには、聞思修もんししゆから入れ。】とある。まず第一は「聞く」、明眼みょうげんの師家しけに会うということ。変な方へ引っぱっていかれてしまうと、一生迷わされてしまう。これは、縁ですね。皆様方が、こういう正しい道場に縁があったということは、私は非常に幸せだと思う。

そうして、次は自分で工夫をする。これをしっかりやらないと【道に聞いて、道に説くは、心過ぐなり。】頭だけで、分かったと思うのでは駄目なんだ。「ズウツ」と自分のものにする。これが工夫。「思う」ということ。これは大事なことです。「思いは正に至る」とまで言われている。これが大事なんです。

しかし、それまでは門外漢だ。中身は「修」。修行をする。これがポイントです。これを通らないと、道には入れない。「聞」「思」「修」、

どれ一つ欠けても道には入れません。

3 一生懸命 三昧・全力を出す

それで「間思修」によって、修行によって道に入るわけですが、まず何が大事かということ「一生懸命」になること。禅では、「三昧」と言っている。これが、なかなかできないんです。子供は子供で一生懸命になればいい。年寄りも年寄りとして全力を出せばいい。できそうなものだが、なかなかできない。

私は、この間7月の初めに、講習のために柳生へ行った。全国から剣道の先生を集めた。50人集まったが、そのうちの半分は八段。日に2回稽古をする。私は82歳になったが、どうしても全力が出ない。去年まではそうではなかった。わずか1年でそう変わった。不思議だと思うが、なかなか全力が出ない。

そういうことを考えると、古人は偉いですね。一刀流の流祖で伊藤一刀斎の後を継いだ小野次郎右衛門という人がいる。名人クラスの人ですが、相手がどんなに弱くても、名人・豪傑と思って相手をしたそうです。だから実に骨が折れると。そういうものを残している。

私は、このことを思い出した。その気になると全力が出る。容易なものじゃないです。全力が出た証拠に、自分を忘れることができた。口で言うと簡単ですが、これは大変なものですよ。

つまり、一生懸命になるということ。ここに「ズーツ」と嵌^{はま}らなくちゃいけない。どの方面でも、これに3年かかると言っています。絵なら「ポチポチ3年」、尺八なら「首振り3年」と言っている。剣道なら「打ち込み3年」。無味乾燥なものに全力を注いで修練しなければいけない。禅なら、公案なしで数息観ばかり3年やる。ばかばかしいようだけれども、これをしっかりやる。

4 華嚴の四法界

全力の話は、両忘庵老師も「その人により、境涯による。」と言っておられますから、境涯に段階を付けてお話します。まあ、いろいろな分け方がありますが、仮に分ければ、物事は「理」と「事」に分けられます。「理」と「事」に分ければ、禅なら華嚴の「けごん四法界しほつかい」。

(1) 理法界 理(心)の修行・真実の自己をつかむ

これを借りて理と事に分けて、初めの「りほつかい理法界」。こういうものがあるわけじゃないんです。人間が勝手につくったものです。「本体」の方に偏ったもの。あらゆる働きを奪ってしまった所。とにかく、本当に「ズウーッ」と一生懸命になる。そして、一瞬三昧の所へグウーッとする。自分の持っている十の力が十出し切れた時には、自分を吹き飛ばしてしまう。それが「理」です。

ここをやり損なうと、大変な問題になる。よく第一世総裁の耕雲庵老大師が「みんなのは、あれは見性じゃないんだぞ。知性だよ。」と言っておられた。「知性」じゃ駄目だ。見性しないといけない。これは大変なんだ。これが最初の「理」。馬鹿正直に、本当にそのものに成り切るんです。こういうことは、今の世間の教育には、どの方面にもありませんね。ここへ力を入れる。これが根本問題になる。

こうなった証拠にどうなるかと言うと、まあ「手の舞い、足の踏む所を知らず」と言うが、とにかくもう不思議で、愉快で愉快でたまらなくなっちゃう。本当の「自分一人」になる。禅語にこういうのがありますね。「かみへん上片瓦がのこうべ頭を覆うなく、しもすんど下寸土の足を立すところなし。」このとおり。これが「理」なんです。ここが大事なところなんです。これに「正念」という名前をくっ付けてもいい。

だから、正受老人は「正念工夫不断相續が大事であるけれども、正念のいまだ不徹底な者は、明眼の師家に証明してもらえ。」と言っている。これは「一人免許じゃ危ないぞ。」と。こういうものなんです。

「間思修」の修行によって、初一步は師家に証明してもらおう。これが「正念」。

ところが、それだけで置くと人間というのは弱いもので、それに執着いたします。執着したら、通用しやしない。自分だけで生きているんじゃない。自分の周りがある。

(2) 事法界 事(実行。剣道の技)の修行。相手に応じて千変万化する。真実の自己を見失わない

そこで、第二段階の「事」の修行に入っていく。「理」から「事」に入っていく。ところが、この「事」の修行がややこしい。「理」の修行はすこぶる痛快であるが、「事」の修行になると、なかなか思うようにいかないんです。何かやろうとすると、やろうとする前に、ちょっとそこへ^{とど}停まる。やった後で、ちょっと気持が抜ける。何にもやらないでいる時は、自分が居着く。そういう細かい病気になる。所作をやる上で、自由自在にいかないんです。ここで、まじめにやると、くたびれちゃう。もう嫌になっちゃうんです。

ここで大事なものは、どんなに苦しくても気を抜かないという、これが秘訣^{けつ}です。不退転、これでいく。毎日毎日修行をしていても後退り^{あとずさ}ばかり。10年経っても、ちっとも進歩がなくても、気を抜かない。「グウーツ」とね。『四十二章経』ではこう教えている。「牛が重い荷物を背負って、泥の沼の深い所を歩いて来るようなものだ。」苦しくて、もう死ぬ思いだ。そこでも「休むな。」と言っている。「左右を見ないで、向こう岸まで行け。」と言っている。「向こう岸まで行ってから休め。」これは大事な所ですね。剣道のことで言うと、宮本武蔵は「渡^とを越せ」と言っている。そういう難場にかかると、どうしようもない。そういう難場がある。そこは、全力で越してしまえ。そうすると、また波が平らかになる。「渡を越す。」ここで、腰を折る人が非常に多いんです。この時、大事なのがお師家さんと友達です。そ

ういうふうな力も得て、早くその「渡」を越す。

まあ、何が苦しいと言って、最初の「理」を悟る前が一番苦しい。「理」を悟った後の「事」のところが、これが大変なんだ。「漸行^{ぜんこう}」というところですよ。頓悟^{とんご}じゃない「漸行」。この時期に、本当に気を抜かないで修行して「正念の相続」、この力を身に付ける。禅で言えば「道力^{どうりき}」を付ける。

「道力」を養う上において、非常に大事なものがある。それは「呼吸法」です。あれ程の白隠禅師でさえ、この「事」のところで、日常生活の動静がスラスラいかないものだから、命を捨ててやろうと修行した。1カ月で神経衰弱になった。それで白川の白幽という仙人について、軟酥^{なんそ}の妙術（内観の法）の秘伝を授かって治った。呼吸法なんです。いくら焦っても駄目。呼吸法が大事です。ですから、耕雲庵老大師が「日々一炷^{いちちゆうこう}香」と言っておられますが、あれは最低限必要なことですね。だから、これには深い意味があります。数息観でいいですから、毎日毎日「ズーッ」と。これで「道力」を養う。

（3）理事無礙法界 悟りと実行の一致・自由自在の境涯

こういうふうにしてズーッと通っていくと、最初の「理」と第二段階の「事」が一つになる。「理事無礙^{りじむげ}」こうなってくる。例えると、これも『四十二章経』にあるんですが、「琴」みたいなものですね。仏が、修行者のお経を唱える声があずっているから、「おまえは、元何をやっていた者だ？」と尋ねた。修行者は「琴を弾いておりました」と答えた。仏は「琴の糸が緩んでいたらどうなる？」「音が出ません」「ギリギリと緊張していたらどうなる？」「音が切れてしまいます。」それで仏が「緩まず、急ならず、その中ならどうか？」と言った。「これなら妙音が出ます。」ここですね。これは理屈じゃどうしようもない。自分の体がそうなるより仕方がない。これが「理事無礙法界」で

す。「理」と「事」の二つがピターッと一つ。ここへ来るんです。ここへ来るとコロッと。第二の「事」の修行をしている時は、正念を続けようとして歯ぎしりして頑張っているが、そこを通り越すと「理事無礙法界」即、これは遊ゆ戯げ三ざん昧まい。もう力まなくていい。遊びになるんです。それでいて、実際は最高の働きができる。ここへ出てくるのですが、ここは別な名前では言いええば【平びょう常じょう心しん是これ道どう】。どんな場合であっても、自分というものが変わらない。晴れてよし曇りてもよし富士の山、元の姿は変わらざりけり。「正念」も、ここまで行くと、やや最高ですね。

例えて剣道の言葉で言えば、「案山子かかしの境涯」という。案山子は貧弱ではあるが、内容はある。何も持っていない。素っ裸。無心なんだ。こういう境涯ですね。無心ならどうか。無心だから相手が映る。こっちに既成概念が何も無いんだから、前へ立てば相手が映る。これが「理事無礙法界」です。「正念」のギリギリの所と言ってもいいでしょう。何にもない。それでまず、ここを目標として修行する。大変な問題ですよ。相撲で双葉山がここを目標にしてやった。あの人は、やや近くまで行った。

どれほど大変かを、剣道の例を取って説明すると、相手と対峙たいじして立つ。誰でもこの時は「正念」です。ここでは、自分というものを見失っていない。何でも自主的だ。これは良い。右足を半歩出すと狂っちゃう。たったそれだけで。「正念相続」が実に難しい。これでわずか「ヒョッ」、それで駄目になっちゃう。大変なもんです。出すと駄目になるけど、仮に相手を前にして右足を半歩出すことができれば勝てる。こういうものなんだ。それが呼吸。呼吸を練ってくると、そこへ行くんです。

一呼吸の間に「雑念を交えない」。「ズーッ」と。世の中のことも、これです。世の中の元は人間でしょう。人間の元は心でしょう。

世の中が騒がしいと言っても、結局は人間の心が動いているんだ。世の中の騒がしさに迷わされている。本当に「理事無礙」の所まで練り上げていけば、世の中が動いているのでも、何でもありはしない。どんなに動いている中に入っても、本体が乱れない。これが「理事無礙法界」の所です。話は訳ない。話すことは、誰にでもできる。しかし実際に行うとなったら、これはもう夢物語。その位難しい。これが「正念」です。

5 正念相続の修行

ですから、ここの修行は「正念」がどこで切れるか、どこが切れな
いか自分で綿密にやっていくしか術すべはないです。日常生活において、
その切れる所は、その人その人で違う。自分はどこで切れるか。切れ
ない所はどこか。そうやって正念の工夫が続くようにする。これが正
しい修行。ですから、人間禅教団では、正念を誓うとは言わない。【正
念の工夫、断絶するなからんことを願う。】と言っている。われわれ
は、すぐ「正念」が切れる。だけど切れたっていい。いくら転んだっ
ていい。転ばないということは、転びつきりだからだ。転んだら、ま
た起き上がればいい。こういうようにして、ズツ、ズツ、ズツとやる。
これ以外にやり方はありません。これが一つ。

もう一つ大事なことがある。相手が自分に映るわけだが、映る相手
は千変万化。この修行をしなければならないんです。この修行は理論
じゃ駄目だ。実際に千変万化の人々の中に入って修行しない以上、そ
れは得られない。だから「案山子の境涯」まで行った人は、まあ古人
がみんなやっているでしょう。乞食こじきの仲間に入ったり、山に隠れたり、
あるいは市いちに入ったりして修行している。これは何かと言うとね、千
変万化する相手に応じる研究。相手がある中で「正念工夫」を修行す
る。十人十色の相手に対して、「正念」の工夫をやる。こう言うと、
大変難しいことのようになりますけれども、難しいことを言っている

わけじゃない。当たり前のことを、当たり前に行っていけばよいのだけれども、こういうことは口で言えば易しいが、実際に行くことは容易なものじゃない。これが「正念修行」の根幹です。

この話は口では説明できないことですから、話をすればするほど、皆さんを迷わすことになる。後は、華嚴の四法界は『人間形成と禅』に耕雲庵老大師が書いておられますので、皆さんがお読みになって、あれによって理論面のことを研究工夫していただきたいと思います。私の「正念相続」の話、これで終わらせていただきます。

6 最後の段取り 呼吸の間

それから、耕雲庵老大師がいつも学生撰心会の後の茶礼で言っておられたことですが、「『段取り・真剣・締めくくり』と『日々^{いつちゆうこう}炷香』を土産にして帰っていただきたい。」これを何度も言っておられた。私がこの年齢になって思うことですが、この「段取り・真剣・締めくくり」ということは非常に深い。

今考えていることで大抵のことは段取りができますが、自分の最後の段取りということは、いろいろ考えておく必要がある。自分の最後をどうするか。その段取りは、なかなか難しい。皆さんは若いから、若い人にそういうことをお話しするのはどうかと思いますが、参考までにお話しします。二、三例を上げてお話しします。これも正念の内。

ある老師さんが私にこう言った。「寝たきり老人になって、人の世話になるのは嫌だな。」ってね。お師家さんだ。私は、ちょっと段取りがおかしいと思う。人の一生とはどういうものですか？ これも『四十二章経』にある。仏が沙門^{しゃもん}に「人の命は幾許^{いくばく}の間にありや？」と尋ねた。弟子が「数日の間。」と答えた。修行者だから、ちょっと良いことを言ったわけだ。二、三日の間。そうしたら、仏が「汝、未だ道

を知らず。」それで、別の修行者に「人の一生はどうか？」と尋ねた。そうしたら、その修行者は「^{おんじき}飯食の間。」と答えた。ご飯を食べる間。「汝、未だ道を知らず。」もう一人に尋ねた。「人の一生は、どこまであるか？」。その修行者は「呼吸の間にあり。」と答えた。そうしたら、私は「汝、道を知れり。」これでしょう、人の一生は。呼吸。吸う息の時は吸う息。これが一生でしょう。吐く息の時は吐く息。それ以外に何がある。これが人生というものだ。それをいまだ寝たきり老人にならない、先のことを考えている。

他人のことはともかく、最後をどうするかという問題は、自分自身のことになると大変な問題です。この間も、韓国で金大中さんが死刑の宣告を受けたと新聞に出ていた。あの方はクリスチャンですが、その時に死刑になるまでの間をどう過ごそうかと迷ったそうだ。そういうものです。迷う。そうしたら、次の裁判で無期に減刑になった。その時に、キリストの教え「人間の苦しみは、今日一日でいいじゃないか。」ということが分かったそうだ。

あれ程の人でも「呼吸の間にあり。」ということが自分に入っていない。これは段取りだね。始めに、終わりのことをよく考えておくことが大事です。バタバタしない。「呼吸の間」始めに終わりがある。何年か経って最後が来るんじゃない。現在が最後ですよ。「呼吸の間にあり。」それが実際に自分の身に付く。これが修行。これは容易なことじゃないです。それさえ分かっていたら、後はその人によって、どうやったってよいでしょう。人間の締めくくりは、その人の好き嫌いでしょう。

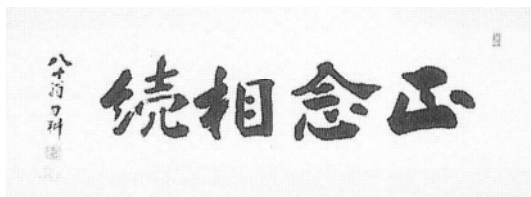
山本玄峰という人は、面白い人だ。90歳になってから、「俺は今年死ぬよ。」と言って、飯を食べない。寿命の来るのを待つことはない。死ぬと思った自分の方で「^{せん}先」を取って、自分で死んでいけばいい。これも一つのやり方でしょう。「呼吸の間にあり。」がはっきり分かれば、やり方はいくらでもある。「一大事」は、私が「汝、道を

知れり。」と言う「呼吸」という所。これに、しっかりと参ずることが私は大事と思うのです。

皆様方が日々一炷香をお坐りになるのも、いろいろのことも最後に詰めれば、この「一呼吸」。その「一呼吸」に「正念」という名前を付けまして、今日の話を終らせていただきます。

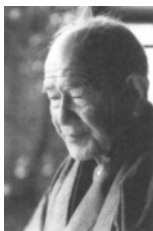
(昭和58年7月24日、夏期学生修禅会の法話より)

(注)僭越^{せんえつ}でございますが、全体を6項目・3段に分け、それぞれ表題を付けさせていただきました。この法話では、華嚴の四法界のうち、事々無礙法界^{じじむげほっかい}(事理相忘^{そうぼう}の修行)については触れておられません。事々無礙法界につきましては、小川忠太郎述『剣と禅』(人間禅叢書^{そう})の「剣道の理念について」をご参照ください。(編集部)



正念相続 八十翁刀耕

著者プロフィール



小川刀耕(本名/忠太郎)

明治34年、埼玉県熊谷市生まれ。剣道範士九段。警視庁剣道名誉師範。全日本剣道連盟相談役。小野派一刀流免許皆伝。昭和9年、両忘協会釈宗活老師に入門。昭和23年より釈宗活老師の法嗣^{はっす}耕雲庵立田英山老師(人間禅教団創立者)に参禅。禅の蘊奥^{うんのう}を究め、無得庵の庵号を授与される。人間禅教団総務長、本部道場長を歴任。昭和31年、同教団附属宏道会の創立以来、最高師範として小野派一刀流・無刀流・直心影流を指導。平成4年1月29日帰寂。享年91歳。